

第5節 (実践7) 図書館ゼミで学ぶ人権感覚

～F高校の実践～

1 図書館ゼミとは

F高校では、1993年から「図書館ゼミ」と呼ばれる学習会を図書館の閲覧室や司書室で開いてきました。このゼミナールは、あるテーマに興味を持つ生徒（多くは図書委員）が中心になって、講師を依頼し講演会を開いたり、自分の調査研究の成果を発表したり、読書会を開いたり、様々な活動をしている生徒と教師の自主活動です。

1998年6月からの1年間の活動の題目だけをあげてみましょう。

○オウム事件のその後 ○松本サリン事件を通して ○ロシアの歴史に見るロシア人の民族性～生活と文化～ ○大澤真幸さんと語る ○永六輔さん特別講演～教科書しまって人生談義～ ○アンネ・フランクは何を夢見たのか～アンネの日記を読み返す～ ○映画と料理でX'mas ○調律の道36年～音楽家との出会い～ ○ゼノンのパラドックスからの数学史 ○ちいおばさんの人形劇はじまりはじまり～AIDSが育ててくれるもの～ ○スヨコ記念日／三十一文字の青春 ○フランス文学入門とシャンソン ○チビクロさんぽと心理学～絵本における差別表現～ ○奥原明男さんと語る ○ぼくはウナギだ～日本語について考える～

図書館ゼミを一言で紹介することは難しいので、図書館ゼミを担当した生徒の言葉を紹介することにしましょう。

ゼミは、私に「考える」ことの大切さを訴えました。受身的で、限られた範囲で考えることを必要とする傾向になりがちな日常生活に刺激を与えてくれました。外部からの講師の先生、また校内の先生のお話を聞き、興味をそそる事を討論しあい、自分なりの考えをもち、他人の意見を聞く中で「学ぶ」ということの自分なりの方向性を確固たるものにしていくことができました。さまざまな人のあらゆる姿を知りました。ゼミを担当する友達の生き生きとした姿、先生の本音、外部の方の仕事をする様子、すべてが鮮明によみがえります。何が大切かを、多くの場で感じとり、そして学びました。ゼミを通して出会った人、そして、すべての本に感謝をし、ゼミを通して得た忘れ難い多くのものを持ちつづけたいと思います。(図書委員長Iさん 『螢燈』(1)のあとがきより)

2 図書館ゼミでの多彩な「人権」の学び合い

図書館ゼミの数々の活動の中で、「人権」「命」「差別」など同和（人権）問題に関するゼミのいくつかを紹介しましょう。

(1) 朴慶南先生を囲んで (1997.10.9)

今週の9日（木）に、2学年同和人権学習会があります。その会では、作家のキョンナムさんに講演していただくことになっていますが、図書委員会では、講演の後にキョンナムさんをお招きしての座談会を計画しています。キョンナムさんは、日本生まれの在日韓国人で、作家のお仕事の他にもラジオ番組や講演活動など、多方面で御活躍なさっています。彼女の実体験に基づいて書かれた文章は、一風変わった読後感を与えてくれ、その表現の面でも現在注目されています。当日は、講演内容の質疑応答や著作を読んでみての感想を語り合うなど、キョンナムさんとの交流をすすめてみたいと思っています。（「ミニ青燈」(2)より）

講演会、座談会でも、慶南さんは“命”についていろいろ語って下さいました。失敗や困難にくじけないであきらめずに努力すれば、必ず夢はかなうということ。一度しかない自分だけの命を、たった一つの個性を、輝かそうということ。そして、自分の命も他人の命もかけがえのない貴重なものとして受けとめるということ。当たり前のようでいて、とても大切なことのように思います。明るく前向きな慶南さんからの、このような話は、私の中に勇気や希望を残してくれました。（生徒Nさんの感想『螢燈』より）

(2) アンネ・フランクは何を夢見たか ～『アンネの日記』を読む～ (1998.10.27)

今回のゼミは多くの人に読み継がれてきた『アンネの日記』を、歴史学の立場から、地歴科のO先生にお話していただきます。日記に書かれた隠れ家での自由を奪われた生活の中で、ナチス・ドイツにいつ捕らわれるかという恐怖におびえながら暮らしていた彼女。彼女がどのような時代に生き、何を夢見ていたのかということに焦点をあてて、ひとあじ違う『日記』読解をして下さる予定です。特に、この時代の背景には、歴史的に根深いユダヤ人差別の物語が隠されているようです。そしてそのようなユダヤ人差別は、アジア太平洋戦争の時代の日本人の中国人・朝鮮人に対する差別意識と重なりあうものがあるはずです。これらの問題について考えながら、アンネが残した“夢”を皆さんと一緒に考えていきたいと思います。（「ミニ青燈」より）

(3) ちいおばさんの人形劇、はじまりはじまり!!

～AIDSが育ててくれるもの～ (1999.2.16)

「ひとり芝居」人形劇屋の芸人「ちいおばさん」こと木島知草が身体中を使って演じ語ります！ 紙芝居や人形劇というと小さい子どものものと思ったら大まちがいです。おとなの瞳をくぎづけにする力があるのです。ぜひ人形が語りかける性について、HIV/

AIDS について、そして友情、人権について……のお話を聴いて下さい、観て下さい。そして私がここ 8 年の間に出逢い……別れた人たちのこと、AIDS という病気で亡くなった友のことを語ります。彼らの生命の証を記録した一畳の布、心こめて一針一針縫いあげた美しいキルトに触れて感じて欲しいのです。死や病を遠ざけずに私たちの身におこる日常のものとして見つめてみませんか……。 (木島さんからのメッセージ「ミニ青燈」より)

……今回の図書館ゼミでは、4 人の人のメモリアルキルトを実際に見せていただき、エイズに対する偏見、差別は無知であることによって起こるものだという事を強く感じました。知る事によって、自分が感染することを妨げるだけでなく、感染してしまった人の事をより理解することができるのです。人の体の痛みや心の痛みはその人でなければ、他の人には本当に分かるものではありません。しかし、それを分かろうとすることによって、それに近いものを感じることができ、その人の力に少しでもなれるのだと思いました。エイズと戦い、毎日を一生懸命に生き抜いた人達のことをキルトと共に知ることで、ゼミが終わる頃、目に涙をためていた人は少なくなかったと思います。……

(生徒 Y さんの感想「青燈」(3)より)

(4) 奥原明男さんと語る 1999. 6. 17

奥原さんは不慮の事故で障害をおいながらも、車椅子バスケットの日本代表として、また、アイスレジャスピートスケートの選手として長野パラリンピックに出場するなど活躍されている方です。スポーツを通して強く生きることや、仲間との交流をはかり、すべての人々がともに生きぬくような社会を目指している奥原明男さんのお話を聞かせていただきます。(「ミニ青燈」より)

以下は、座談会の様子の一部です。

生徒：小学校の頃は、学校の行事などで、福祉について考えたり、接したりする場があったのですが、高校に入って、勉強を重視して、でも何かやりたいという言う気持ちはあるのですが、私達でできることって何かありますか。

奥原：みんなボランティアってやったことある？

生徒：あります。

奥原：そのとき、楽しかった？

生徒：とても役に立ったことが多かったです。

奥原：それって一種の喜びだよね。ボランティアは人の為にやらなくていい。自分の活躍できる場所で、手助けして楽しめれば、それがボランティア活動となるだろうし、何か他の事にも手を出したくなる、そこから周りも広がっていくと思う。話してみたいと言う人がいたらぶつかっていけばいいと思う、僕たちも待っているから、たとえ、嫌がられても、そうしていくしかないと思うよ。

正直なところ、障害者と聞くと身構えてしまうところがありました。今ではもう大丈夫だと言うと嘘になるけれど、この座談会に出て、そんなに緊張しなくても大丈夫なんだなということが分かりました。奥原さんは、面白く、また、シリアスに質問に答えてくださって良かったです。車イスバスケットなど、障害者のスポーツ団体にはあまり補助が出ていないということをお聞きして、日本はもっと変わらなければいけないだと、痛感しました。奥原さん、これからも頑張ってください。

(生徒Kさんの感想 『螢燈』)

- 注記 (1) 螢燈：図書委員会が製作した図書館ゼミの活動をまとめた冊子の名称
(2) ミニ青燈：図書委員会が随時生徒向けに発行するお知らせの名称
(3) 青燈：図書館報の名称